



# ツウとトラ

むかし、ある森で、たくさんの動物たちが  
なかよく暮らしていました。

その森で、人間にとっても会いたがっているゾウとトラが  
おしゃべりをしていました。

ゾウがある日、言いました。

「人間はどんなすがたをしているんだろう」  
するとトラは、こたえました。

「人間はとっても小さくて、賢いと聞いたよ」

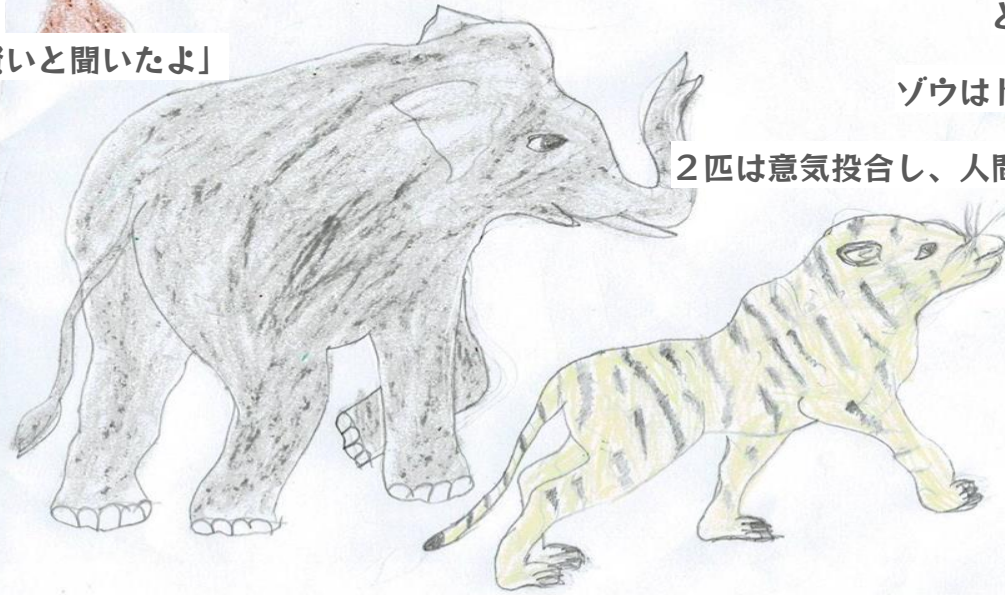
そしてゾウは言いました。

「人間の頭は僕の頭より小さいのに、  
どうして賢くなれるのさ？」

「人間は賢いから、自分たちで家をつくってそこに  
住んでいるらしいよ。人間に会ったら、  
僕らにも家を作ってもらおうよ」  
と、トラはこたえました。

ゾウはトラが言うことに大賛成。

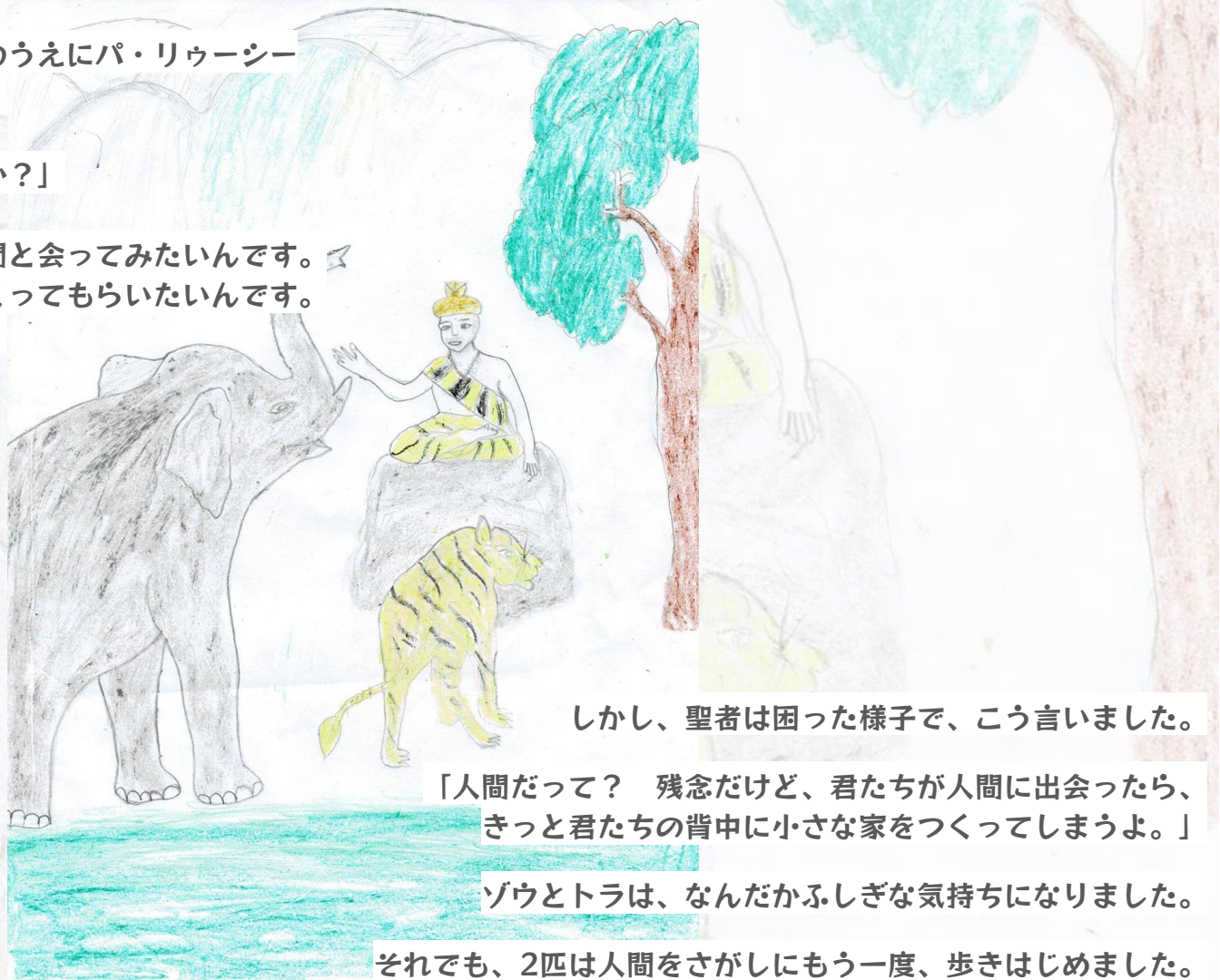
2匹は意気投合し、人間を探しに旅立ちました。



ゾウとトラが道を進んでいると、石のうえにパ・リウーシーという名前の聖者が座っていました。

「そこの君たち、どこに行くのですか？」

ゾウはこたえました。「僕たちは人間と会ってみたいんです。会ってみて、彼らに僕たちの家をつくってもらいたいです。人間はとっても賢いと聞きました」。



しかし、聖者は困った様子で、こう言いました。

「人間だって？ 残念だけど、君たちが人間に出会ったら、きっと君たちの背中に小さな家をつくってしまうよ。」

ゾウとトラは、なんだかふしぎな気持ちになりました。

それでも、2匹は人間をさがしにもう一度、歩きはじめました。

しばらく歩いていると、大きな木が倒れて道を塞いでいました。

トラは、それを見るとすっかり気が変わってしまいました。

「これはきっと、悪いきざしだよ。  
ゾウさん、君は先に進みなよ。僕は、もう行かないことにする」

しかし、ゾウは人間の顔を一目見るまで、  
森に戻る気持ちにはなれないといった様子です。



ゾウとトラは、別々の道を歩くことになりました。

トラは自分達が住む森に帰ってしまいました。

ゾウは一匹で、そのまま前に進んでいくことにしました。

しばらくすると、服を着て二本の足で歩く、顔が皺だらけのふしぎな動物が歩いていました。

「ねえねえ、きみたち。  
人間はどんな姿をしているか  
知っているかい？」

僕は彼らに、家をつくってもらいたいんだ。  
人間はどこにいるか知ってるかい？」

そうすると、二本足の動物は小さな声でささやきました。

「おじいさん、どうやらこのゾウは私達が  
人間であることを知らないようだ。  
そのくせ私達を従わせて家をつくらせるだって？」

そう、ゾウが話しているのは、  
まさしく人間だったのです。

おじいさんはゾウにこう言いました。

「そうかいそうかい。  
私達が人間をここまで連れてきてあげるよ。  
その代わりに、約束してくれないか？」

「どんな約束ですか？」とゾウはいいました。

「私たちが人間をここに連れて来る前に、  
君の足を木の弦(つる)で縛らせてほしいんだ。  
なぜなら、人間はとっても大きな頭をしていて、  
君を見たら大きな手でつまみあげてしまうからさ。  
そしたらとっても危ないからね。」

ゾウはそれを聞いて、  
「しんせつにありがとう」とこたえました。



老夫婦は木から弦(つる)を取ってきて、ゾウが動けないように足と鼻を縛りました。夫婦はゾウに尋ねました。

「少し動いて見せてくれないかい？」  
「しっかり結べているかい？」

ゾウはこたえました。「もうすっかり、動けないよ」。

すると老夫婦は、ゾウを大きな木の棒で叩き始めました。

「これが人間だ！私たちが人間なんだよ！」

老夫婦は大きな声で、どんどん激しく叩きます。

「私たちに家をつくって欲しいだって？  
ゾウのくせに、生意気な子だね！」

ゾウは「痛い痛い」と泣き叫びました。

そして、人間のために何でもすると誓いました。



その後、老夫婦はゾウをたたくのをやめ、  
縄をほどきました。  
それから、ゾウの背中によじ登り、  
ゾウを歩かせて自分たちの家に帰りました。

その日から、ゾウの背中には人間が座る椅子、  
太陽の光と雨風をしのぐための屋根がつくられました。

ゾウを叩く鋭い鞭が、椅子の後ろに取り付けられました。

こうしてゾウの背中には、  
人間が造った小さな家が建てられました。



精霊信仰(アニミズム)を基底とする、自然界の生物と人間の絶対的な平等観がラオスの精神であろう。その流動する生命の感覚から、動物同士の対話や出来事を織り交ぜ展開する物語が多くの少数民族に伝承されてきた。「ゾウとトラ」は、動物たちが主役となった典型的なラオスの民話である。クム族を中心に、ラオ族にも知られている。トラとゾウが人間への興味関心から旅に出るが、後述するパ・リュウシー(ພະລືສີ)との出会い、倒木を見た偶然をきっかけにこれを不吉と捉えてトラは森へ帰ってしまう。結果として、ゾウだけが人間に隷属してしまうこととなった。ラオス少数民族の世界観は、このように自然(動植物)の立場から人間を見る。知覚可能な自然(動植物)についての経緯(いきさつ)を紹介する「自然の歴史化」(historical nature)と称すべきプロットがその特徴である。それとは逆に、古代ギリシアの場合は、自然を物として収集し分類する「博物学」(natural history)を形成した。このような西歐的世界観と異なる自然観が、我々にとって新鮮な感覚を与える。自然の立場から人間を観察し、人間の知性の狡知を皮肉(アイロニカル)に描くシーンは、この物語の後半を印象的なものとしている。

この物語のモチーフには、なぜゾウとトラが起用されたのであろうか。ラオスの山麓と森林の奥地には昔からインドシナ・トラが生息し、人々は畏怖しながら宗教的にはこれを称え共生してきた。たとえば、クム族ではトラはトーテム(祖霊神)の一つであり食べることができず、その靈魂が人間の身体に入ると病気になると考えられていた。またモン族の一部は、人間は死んで後にトラに生まれ変わるとも言われている。インドシナ・トラは現在、絶滅危惧種に指定され、ラオスの山間部ではほとんど見かけられない。一方でゾウは、古来より人間の移動・運搬手段といった役畜として使役されてきた。人間が象に乗る最古の記述は、古代インドのリヴ・ヴェーダに見られる。ラオスは古代インドからカンボジアやビルマを介して物質的にも精神的にも多くの影響を受けてきた。13-18世紀に栄えたラオスの国・ランサーン王国(ອານາຈັກລ້ານຊ້າງ)のランサーンは「100万(ລ້ານ)頭の象(ຊ້າງ)」を意味する。戦争で騎乗する戦象は、ラオスのみではないインドシナ大陸部の歴史で広く確認されており、たとえば7世紀クメール王朝最盛期には20万頭がカンボジアにいたといわれる。アンコールトムなどの遺跡には、チャンパ(南ベトナム)と戦う行列に象が描かれている。ラオスでは近代19世紀のゲリラ戦でさえ戦象の使用が継続された。

この物語に登場するパ・リュウシーは、仏教伝来以前から伝承されてきたラオスの古い民話にたびたび登場する。パ・リュウシー(ພະລືສີ)のパ(ພະ)は日本語で「聖」に相当し、リュウシーは古代インドのリシ(ऋषि)を意味している。リシは俗界を離れて山林に隠棲する修行者であり、苦行(तपस - tapasは熱を意味する)によって神秘的直観を得て神(天界)と人間界を含む自然界(地上界)を媒介する。この民話ではパ・リュウシーが動物と対話しており、人間と動物たちを媒介する語りをしている。

古代インドの最古の教典リヴ・ヴェーダはこのリシたちが感得した自然の神々への讃歌集という性格をもつが、この物語はラオス精神文化の古層に古代インド文化のアニミズム的世界観があることを伺わせている。自然に還り人間に服従しなかったトラと、逆に人間に使役されることとなったゾウの対照的な運命は、平地にある都市生活への従属とそこから距離を取って自然とともに暮らす山地民族の平和を暗喩するのかもしれない。





イラストレーター  
サイ・ソーンさん(16歳)

民話原稿執筆者：チットサワン  
翻訳監修・解説：横山泰三

制作:FaYプロジェクト  
2022年1月6日(第一版)  
ルアンパバーン県ラオスの文化と民話研究所  
Research center for Lao Culture and Folklore (ラオス)  
NPO法人わかもの国際交流協会 | Wisa(日本)